

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成15年  
11月号

毎月23日発行  
通巻399号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成15年11月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)44-0015  
★印刷 大倭印刷 監  
★定価 1部 250円  
年間購読料3,000円(送料共)  
★振替口座 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



静物「柿とザクロ」 東京都国立市 春日トシコさん絵(文・6頁)

## 昭和55(1980)年初め頃の座談会から 大倭紫陽花邑に住んで(3)

「前進友の会」の皆さんを迎えて

大倭会館にて

### 中心に神さんのいる社会

法主 終戦で負けた時に、「ああ、俺の出て行く世の中になつたなあ」と思つたんです。それまでは小さくなつていたんです。

ちやうど弥生時代のような農耕生活をしてきた社会が、私にしてみたら一番気が惹かれるし、また自分の理想でもあつたんです。縄文時代から弥生時代となれば、定住して農耕をやつて、集落で生活している形が出来た頃ですからね。

私は大学にいた頃、ずっと考古学ばかりやっていました。考古学というのは、言わば唯物論の学問です。遺物とか遺跡とかをもつて古代文化というものを調べていったんですが、私はいつも、遺跡とか遺物を通して、その当時の生活とか精神的な生活のあり方とか、そんな方面を重点において考えておつたんですね。だから今でも、ああいうような時代の人達の気持ちというのが、何か分かるような気がするんですね。

古代社会の集落というのは、全部中心が神祭りになります。だから、人間が人間をどうこうするんではないんです。我々はみんな神さんによつて生かされている、神さんによつて何か役割を持たされている、全ての中心は神さんです。天皇陛下やあらへんし、人間やあらへんし、酋長やあらへんしね。宗教は神さんの前には平等なんですね。そういうような社会が、私にしてみたら一番気持ちに合う

んですねえ。

私自身は戦争に負けたからといって、何にも気持ちには変化がなかったんです。一般の人はいろんなショックがあったと思うんですけどね。終戦の時には、家族が戦死された遺族とか多かったし今の若い者には想像もできないようないろんな事情の家庭がありました。

## 紫陽花邑の一つ財布

男性B 一つ財布と言うと、自分が思うような事が出来ないとか、例えば、車が欲しいと思った時に車を買えないとか、「何も出来ないなあ」と感じるようなことはあるんでしょうか？

法主 それは人間はやっぱり飯食べていかなあかんから金もいります。現在の大倭紫陽花邑なら、私は関係しないから全然知りませんけれど、車でも買えるか買えないかとか、みんなで適当に上手にやっているんじゃないですか。

今日でも「新しい車に買い替えたからお祝いしてや」と言われたのを見に行ったら、走っておつても目立つような車やつたで。(笑)

お互いに仕事をしているもの同士が相談しているのと違いますか？

杉本順一 お金の入ってくる量は、全体としては決まっていますからね。そこさえ分かっていると使っておれば、まあ何とかやっつけていけるということですよ。車というのは今は消耗品でしょ、一定時期が来ればどうしても買い替えないといけませんわね。今はガソリンが高いから台数を減らして、質の良い車を買おうかというような方針で、僕ら若い者が一応やっつけているわけです。

どんどん貯めて「何かしよか」という甲斐性もあんまりないし、それほど意欲があるというわけ

でもないという感じですけれども。(笑)

それから、大倭紫陽花邑の場合、一つ財布でやっているグループもあるし、経済面では個人家庭でやっておられる人達もいるし、それがまた一つの大倭になっていきますので、全部が一つ財布でまかなっているというものではないんです。

法主 そうやそうや。その辺りを言うておいてあげてや。

塚崎医師 一つ財布でやっている家庭と、個人でやっている家庭では、違いがありますか？

杉本 どうなんかな？ 個人でやってる人は、それぞれ別の事情でいろいろやからなあ、一概に言えませんしね。

法主 一緒とちがうか。

杉本 あんまり変わらないと思うんですけどね。

塚崎 家庭相互の交流とかは？

杉本 親しみの度合いというのは全部が全部同じではありませんからね。やっぱり人間ですから合う合わないもあるだろうし、何かある時に必要に応じて付き合う場合もあるだろうし。意識的にお互いに交流しなければいけないというようなしんどいことはしていませんね。

大倭紫陽花邑の外から来て仕事をやってくれている人もたくさんいます。その中には大倭と付き合い方もいろいろし、仕事の話だけの付き合いでそれ以外のことは一切関係ないという人もいますし、これもいろいろですわ。

あそこが買ったからうちも買わないかんとか、あそこ係長になったけどうちのお父さんまだヒラやとか、こはそういうのはまったくくないですね。そういう点は違いますね。個人家庭が見栄を張り合うということはないと思いますね。

それは、法主さんは大倭殖産(株)の社長でもあるし、他の者も課長やの部長やのという名前が付

いているわけです。社会に対して、向こうが会社を組織として見た場合に、役職を付けておかないと、よく理解できないんですね。特に役所などに行くとき、会社の構造が理解できないから、一応付けますけれども、そんなのは我々の生活の場から言えばまったく問題になりませんね。

仕事の必要上から言っても役職というか分担は必要ですわね。先ほど塚崎さんが言われたように全部が同じようには能力がないんですから、営業に向く人もいれば、機械使っている方が性に合う人もいますしね。

まったく関係なしに大倭紫陽花邑の事業に就職している人もたくさんいますが、そういう人達に「大倭はこういうところやからこうせい」と、大倭のことを吹き込むとかも特にしていません。まあ、大倭の和やかな雰囲気を感じていただいたらそれで良いという感じでやっています。

面白いと思った話があるんです。大倭紫陽花邑は昭和三十八年頃からコンクリートブロックを作つて売っているんですが、始めからずつとお付き合いしている業者があるんです。毎日のようにトラックにブロックを積んで買つてくれている人なんですけど、「お前とこは、けつたいな宗教やな。わしは十五年間付き合つてるけど、一回も宗教の勧誘せんのはどういわけや」と言うんですね。

つまり彼は宗教というものは勧誘しないといけないものだと思つているんですね。「お前のところは誰もそれを言わんのう」と。言われて逆に「そういういば言わへんなあ」というようなことですね。

やっぱりブロックは宗教法人の事業部としてやっていますから、領収書とかの書類には正式に書いておるんですわ。「よう見たらお前のとこは宗教法人か?」「そうでんねん」という感じ。

男性B 教条みたいなものがあまりなくて、気持

「ただけは分かって欲しいという感じなんですか？  
杉本 別に分かって欲しいとも思ってたんですけどね。(笑)」

男性B 難しいなあ。(笑)

## 世間との付き合い方

杉本 まあ、自分らは自分らでやっている。来てもらうお客さんとは仲良く、お互いに嫌な思いさえしなかったらそれで良いと。商売も結局は、相互扶助ですからね。こちらはブロックを提供するし、向こうはお金という形で返してくれる。やっぱり向こうが成り立つてもらわないと、こちらも売れないわけですしね。やっぱりそれも一つの相互扶助だと思えます。その上に、とりたてて大倭らしくということもないんじゃないですか。

第一、ここに住んでいる者が「大倭って何やろ？」と、そんなに一生懸命に考えていないという気がするんです。たまたま今回こうしてお出でになったから話しているけれども、そういう意味では、普段は実に加え減なものですよ。

それは、中には考えてしんどくなる人もいますし。他の人が同じことを考えてくれるか分からへんし……。しかし、それはそれでまた、考えたらいかんということもないと、僕は思うんですけれども。

生活という基本がありますからね。ごちゃごちゃ言う前に生活というものは厳しいものがありますしね。宗教法人であろうと、共同体であろうと商売という点ではまったく世間と同じ隊列でやっています。霞食べて生きていかれへんし……。

中にはね、「宗教法人やったら、全然税金いらんのか？」と言う人もあって、「そんなことない

ねんで、きちんと税務署も監査に来るんやから一緒や」と言うんですけれどね。ところが、どうしても宗教法人と言えば、お祭りでもあればドカッと寄付やお賽銭があつて、気楽な商売ができるように思われるんですね。

うちは賽銭箱がありません。他人のふんどしで飯食わしてもらわれへんのですわ。

お金は必要ですけども、そんなにお金に縛られて仕事をしている人もあんまりいない、その気楽さだけはあるように思いますね。だからと言って気を抜いたり、いい加減なことでは仕事になりませんしね。

僕の場合、実家はお菓子屋で、商売をずっとやっています。お金をいらうのがものすごく嫌で大倭へ来たんですけれど、金庫の鍵を持たないといけないような役回りになつてしまつて、やっぱり同じですわ。(笑)

集金に行った相手の業種によつても違いますけれど、ブロック屋なんて荒っぽいですからね。学生上がりで行つたら、言葉だけでもぶつとばされますわ。(笑)

それを粘って話して、相手と対等にいけるように気持ちを持つていくとか、そういう意味では、だいぶ鍛えられますね。でも考えたら、社会の人もみんなそうやってやっていますから同じですわ。大倭だからということではないですね。あんまり頭でつかちで生きてきたから、現実にはぶつかつてビックリした話だけの話……。

のつちゃん(青山法義)は、ここで生まれ育っているんやけど、どうや？

青山法義 「大倭ってどういうところやろ？」と自分なりに掴もうとして、まだもがいている状態ですわ。その日その日、ただ飯食うために仕事している(※大倭印刷)というところがあります。正

直言つて、人に話せる状態ではないですね。

女性A この近くの学校に通つておられたんでしょう？ ここ以外の友達の家との違いを小さい頃から感じられたことはないですか？

青山 そうですね。僕の場合は、世間の水準よりは低かったかもしれませんが、大倭がもう経済的にもそこそこの生活はしていましたから。

友達の家へ遊びに行つたり、逆に友達がこちらに遊びに来たりというような付き合いをして、気持ちの上でも形の上でも別に抵抗もなくなりました。外と大倭が違うという風には感じなかったですね。ただ、『宗教』というのが付いていたことで「大倭ってどんな所や？」と聞かれたりしたことがありますね。「別に変わらん」という答え方しかできなかったし、十七・八歳の頃によく聞かれた時には、僕の場合、「ただ親がいたからおつたんや」という言い方しかできなかったですね。

法主 明昌よ、お前もここで生まれてるんやけれど、大倭のことをどない思っているんや？ 自分の思っていることを素直に言うたら良いだけで。

矢追明昌 それが難しいんや。法主 ええ格好するんか？(笑)

世間の人と比較して、「友達の家、ちゃんと入口に門があるけれど、何で大倭はないんやろ？」つて言うてたやろ？

女性A これだけ大きい庭のある家は街の中には全然あらへんしね。

杉本 大倭は、どれだけの広さがあるか、どこからどの辺が境界か分かっているか？

明昌 うん、分かる。

杉本 そうか、今度、門を付けよか？(笑)

鈴木 門作るいうたら、方々へ作らんんなあ。

法主 子供はこつちが想像もつかない面白いことを言うなあ。(笑)

(続く)

# 寸 莎

## 第57回

### 故 中島康治さん



#### 一徹な歩み

今回の「寸莎」は急ぎよ予定を變更して、去る十月二十日の夕刻に不慮の事故で帰幽された中島康治さんのことを取り上げたい。この事故の急報に接して、大倭の人達の間にも稲光のような衝撃が走ったことは、まだ生なましい記憶である。

この稿は、帰幽された康治さんに代わって、実兄の中島健さんから聞かせていただいたお話しを基にしてまとめさせてもらった。

——中島康治さんは、昭和十七年十二月二十三日（この日は法主様の誕生日でもあるが）に、大阪中河内、兄の健さんと一歳違いの次男として生まれた。母方の祖父が戦時中に大阪の砲兵工廠の幹部技術者を務めていて、「器用さはおじいさんの遺伝だ」と後に言われたように、康治さんの手先の器用さは子供の頃から

ら群を抜いていたようだ。

父親の建次さんは商売が好きで、結婚を機に近鉄花園の駅前で小さな食堂を開いていたが、康治さんが一歳の時に徴兵され、昭和二十三年九月に復員して来た。その間、母親の浜子さんは二人の子供を抱えて、親類の手伝いもあつて店を続けていた。

復員して来た父親は、体力衰弱もあり、その年の十二月に亡くなってしまふ。終戦後の花園は、近くに進駐軍の駐屯地が作られ、それを目当ての街娼が徘徊したりして、「ここで商売を続けることは、子育てにもよくないと母親は迷っていたに違いない」と健さんは想像する。

その頃、絶妙のタイミングで、浜子さんは教導に来ていた法主様に出会い、夫に先立たれた翌年の六月二十四日の田植え時に、親類にもほとんど相談せずに大倭一門に入門してしまふ。そして、数カ月後に浜子さ

んは青山日元さんと再婚する。ただし、それは七歳の康治さんにとって新しい父親ができたということの意味しなかつた。当時の法主様は邑に住む全員に、「親子の縁を切れ。自分が皆の親や」と言つて、法主様を親とする大家族の形をとつていたからだ。健さんは、「法主さんが私情を捨てて全員に接してくれたので、康治や自分がどれだけ救われたことか」と当時をふり返る。

康治さんは中学二年頃から、「学校はきらいや。百姓をやりたい」と言つて、卒業後もしばらく百姓仕事をしていたが、大倭で金属プレス加工の仕事を始めることになり、手先の器用さを買われて、たちまちこの仕事の中心的存在になつていく。その後、大倭はコンクリートブロックやグラビア印刷の仕事などにも取り組むのだが、こうした創設期の事業の中で、康治さんは中核的役割りを演じ、大倭一門の生活やそれ以外の事業を縁の下から支えていった。

『おおよまと』に載つた平成八年の座談会の中で、「法主さんが掛けてくれる言葉が、何かおれだけ違うねん。中学へ入る時分から大人扱いやつたな」と康治さんは語つているが、法主様の「神ながら」の教えは彼の中で大きな支えになつていて、物事を判断する時の一貫した原則に

なつていた。健さんは、「時には現実と妥協できず、自分とも激論になることも多かつた」と笑う。

康治さんが最後まで取り組んだ仕事は、昭和五十二年三月にプレハブの販売から出発した倭商だったが、「これまで技術屋で来たのに、慣れない商売には苦労が多かつたらう」と健さんは思いやる。

女性に関しては康治さんの理想は高く、充世さんと結婚したのは四十四歳になつてからだった。でも木綿貴、知佐登、安佐美の三人の女の子に恵まれて仕合せそうだった。

葬儀の日、大倭の拝殿の近くの二本の桜の木に季節はずれの花が数輪咲いた（※5頁写真）。それを見て、急な帰幽とはいへ、康治さんが大倭を舞台として六十年の人生をまつすぐに自分のお役目を演じ切つて、花道まで用意されたと感じた人も多かつたようである。

五日祭のお参りの後に、妻の充世さんは、「これからも、高一、中一、小六の三人の娘を大倭で一生懸命に育てていきたい」と語り、参列者たちも暖かい支援の雰囲気の中で彼女の決意を包んでいた。康治さんの魂も、そのことは深く気にかけているに違いないが、同時に、もう次の使命に向かつて歩んでいるような気がしてならない。（聞き手 岸田哲）



## 「康治君、また会いたいね」

杉本 順一

私が康治君の存在に気付いたのは、一門の家族となつてからである。F.I.W.Cのキャンパーとして邑に何度も来ていて邑人と交流していた頃は顔も見たことがなかった。もう四十年前のことだ。その頃の彼は人前に出てくるのがなかった。

一門に入って邑に中島康治ありと気付くようになった頃の彼はまさに「抜き身の刃」を感じさせる存在であつた。

それは私の入門時にもよく聞いた大倭の教訓、「嘘をつかないこと。一、約束をまもること。一、責任を果たすこと。一、陰日向のないこと」。この教えは毎日子供達となえていたものであるが、彼も又、この教訓をもつて育てられたのである。

そしてもう一つ、彼の生来の強烈な個性を見抜かれた法主さんが、他の同じ年頃の子供達よりも早くから一人前に扱われたことにより、彼自身の光があらわれてきた。

これが「抜き身の康治君」ではなかったか。私なんかは、大倭のことを何も分からず入門したので、彼に話しかけるのは勇気がいったものだ。なにしろ彼にとつて矢追日聖は絶対の存在であり、他に比すべきものなどあり得なかった。

「人の話を聞くのに、言葉で聞くタイプと気で聞くタイプがある」と法主さんから伺つたことがある。まさに康治君は「気で聞く」人であつた。

一歳上の実兄、健君は「言葉で聞く」人である。この兄弟は個性のぶつかり合いで幾たびも火花をちらしていた。私もその間に立つて二人の話を共に聞くという訓練をさせてもらったのである。つ

まり、三人とも人との付き合い方を、大倭の加美さんから教えてもらつていたのである。

彼の個性は結婚する時期についても個性的であつた。結婚式当日、父親役となつてくれた法主さんが「康治の結婚はいつ来るか、いつ来るかと思つていた。今日やつとその日が来た」と喜び、人目もはばからず大粒の涙を流されたのだつた。

貧乏な時代の大倭にあつて、当時の名車スカイラインを法主さんに直訴してOKをもらつたのも、法主さんと康治さんの間にしか分からない何かがあつたのであろう。

やがて彼には女の子が生まれた。昭和六十三年一月の頃である。独身時代の彼が変貌していくのはこの頃からである。いつしか抜き身は鞘におさまつてくる。晩年の彼の子煩悩ぶりは、誰もが知るところである。

仕事で言えば、金属プレス工場、コンクリートブロック工場、四色刷りのグラビア印刷、そして建築工事と商事を扱うという万能ぶりを発揮して次々とそれらをこなしてきた。この真似は誰もできないものである。

その彼もこころ、二年は「何で俺のお客さんはこんなすごい(きびしい)人ばかりなんやろな」と言つていた。そして必ず最後に言つたのは「これも俺の修行やな」と、どんなことも最後まで逃げることはなかった。これはまさに、法主さんの教えのたまものであつたと私は思う。

彼の帰幽祭から五日目、つまり五日祭に、私はあまりにもきびしい現実につらくなり、霊界の法主さんに心で叫んだ、「法主さん、康治君に何か一言はないのですか!」と。

法主は「コウジノ シメイワ カンベキデアル」と、聞こえてきた。「康治の使命は完璧である」と、この言葉の重みは、私も死んでみなければ分からないだろう。康治君は、霊界に持つていける最高の勲章をもらったんだ。おめでとう、長い間ありがとう。ご苦労様でした。

ないだろう。康治君は、霊界に持つていける最高の勲章をもらったんだ。おめでとう、長い間ありがとう。ご苦労様でした。

## 夢かど……

H15・10・22



新潟県佐渡郡

大滝 哲也

深夜、午前零時頃、寝ていたところに元長曾根寮勤務の守下義之さんから連絡がありました。そんな状況だったので夢かとも思いましたが、昼になって、外出中のところ留守電に青山元子さんからのメッセージが入つていたので聞くに及んで、現実であることを知りました。

昔、大倭印刷工場の二階が独身寮のようになっていた(今もそうでしょうか)頃のことです。私が定時制高校から帰つて来て、大倭会館の食堂で一人遅い夕食を済ませ、部屋に戻ると、隣の反保利通さんをはじめ、よく人が集まつてきて飲み会になつたものでした。その後、次第にエスカレーターして、蟹のたたきを食べに高知へ、牛肉を食べに松坂へ、蟹を食べに日本海沿岸にある元須加宮寮勤務の済木宏司さんの郷里へと、有志を募つて旅行を企画したりもしました。その中心となつていた一人が、中島康治さんだつたように思います。やがて皆さんそれぞれ結婚されて、私も大倭を離れてからは、ずっとご無沙汰していましたが、そのときのことは、今も鮮明に思い出されます。

この度は何かと都合がつかず、弔電にて失礼させていたのですが、昨夜はお写真の前に、以前印刷の二階でご本人にしていたのと同じようにして、杯に酒を満たし、康治さんが好きそうなあてをいくつか作つて食器に盛り付け、お箸を添えてお供えし、私も同じ物を自分の器でいただきました。あらためてご冥福をお祈りいたします。

こだまことだま

家族の絆について

奈良市藤ノ木台 清 川 雅 蔵

五月中旬より六く七月中旬、食欲が全くなく腎臓病で約八キロ痩せました。八月三日、高野山夏季大学より帰宅して、大倭病院に緊急入院しました。九月十二日に一度退院したものの、心臓の調子がよくないということで再入院いたしました。

この度は子供がいろいろ心遣いしてくれ、つくづく親子の関係について思い知りました。私は昔人間で、言葉で礼を言うことが出来ない父親です。このエッセイのようなものを書いて、子供に感謝を述べることにいたします。ほんとうに有難う。

占いには凝っていませんが、ビルマ戦線で四回も死にかかり、その後の人生も波乱万丈で、私は運命について研究するようになりました。六月一日には富雄南公民館で約一時間、皆さんに運命についての話をし、その中で、地元の矢追日聖さんや青山日元さんの宿命的な生き方についても紹介をしました。

南方のジャワ・スマトラ・アンボン島に配属になった兵士は全員が戦死。私は暑い、嫌なビルマに配属になったが、命ばかりは助かりました。黄熱病、デング熱、マラリヤ、熱帯熱で死にかかったり、無人島に不時着した時は二日間海亀の卵を食べて助かりました。ラングーンの飛行場がB29の爆撃をうけ、私は防空壕で首まで埋まり爆風で失神しましたが、これもまた助かりました。

日本へ復員の船中で辰春丸事件（マラリヤの戦友のため水を盗んだ元兵士を元将官が殴ったのに

反発して騒乱事件に発展、それが共產思想と見られた）があり、浦賀へ着くはずの船が鹿児島へ着きました。もし東京裁判に回っておれば絞首刑ということもあり得たかもしれませんが、幸いアメリカ兵による民事裁判だけで済みました。そのままだ鹿兒島で代表の一人として四力月半刑務所暮らしをしましたが、その時に、手に入ったのは仏教関係の本だけだったため、私が仏教に親しむようになったのです。

戦後は松下電器、住友金属に勤め、退職後は帝塚山大学に勤めました。唯々、会社のため仕事事、家庭や子供の教育は妻に任せきりでした。今、考えますと、相済まぬ気持で一杯です。

復員後三十年、グアム島の横井さん、ルバン島の小野田さんの記事がきっかけで、ビルマ航空隊のミンガラドン戦友会を私が発起人となって始め二十八年間続けましたが、亡くなったり入院したりで会員も少なくなり終わりにしました。

近頃は公民館活動に精を出し、高野山夏季大学、法隆寺夏季大学、梅心会というサークル、シルクロードの文化と歴史や各大学の公開講座、仏像や能面の彫刻、水墨画、仏画等、いろいろとやっています。そして余命は幾ばくもないことでしょうか、喜んで暮らしています。残された人生を有意義に尽くしたいと思っております。

表紙の絵(イラスト)

岸野 春子

春日トシコさんはお連れ合いと一緒に、今年の東光大祭に来邑。弟の春日作太郎さんによれば、病後とか…。でも、とてもお元氣に見えました。東光大祭の翌日の夜、交流の家のホールでまるで小説のような半生の物語を聞かせてもらいました。昇ちゃん、絵が上手！と教えてくれるので、以前個展をした時の写真を見せて頂く内に、表

直会演芸会案内

平成十五年十二月二十三日(祝日)

大倭六十年 元旦。

法主日聖師のお誕生を記念する祭典。

○午前十時、法主様の奥津城にお参りして、午前十時三十分より大倭大本宮拝殿において日聖祭がとり行われます。

○午後一時より大倭安宿苑長曾根寮の「あじさい広場」で祝賀の直会演芸会が催されます。

○昼食は直会弁当を用意しますので、どなた様もご遠慮なくご参集下さい。

- 直会演芸会の係では、今年も出演される方を募ります。
- あなたのやりたい事をやって共に楽しませて下さい。
- 時間十分前後くらいです。
- 十一月十五日まで受け付けています。

直会演芸会実行委員会

TEL 074-144-0011番

青山法義・中島武宣迄

紙にする絵を送ってもらえないかと頼みました。絵に添えられたトシコさんの詩、「遠くの人々を思う和みの中で心が結ばれている／独りきり心の中が熱くやさしくなつてゆく／これがやさること、救い、と思う／」ありがとう。



## 熱く、そして爽やかな人生

……藤本敏夫を偲んで……

大阪府茨木市 杉 浩 史

藤本敏夫が昨年夏、享年五十八才で逝って一年余が過ぎた。藤本とは、歌手の加藤登紀子さんの夫で、その昔七十年安保闘争を闘った反帝全学連の委員長であり、実は当大倭ともいささかの縁のあった男でもある。私自身、還暦を過ぎたばかりの年齢で、自分より若い人を見送ると云うのには、やはり特別の感慨が走る。

藤本は同志社大学新聞学専攻で、私の二年後輩であった。兵庫県西宮の出身で、生来の浅黒い肌、精悍な顔立ち、新人生の時、彼の持つ鮮やかさと爽やかさは、一際目立っていた。晩年病（肝臓）を得てから後に、その存在を認識した人には意外に思われるかも知れないが、当時文句のつけようのない美男子だったのである。何でもある左翼活動家の先輩の曰く「これからはテレビの時代だから、新左翼もハンサムな指導者を養成しないと……」と云うことで、彼に白羽の矢が当てられたと云う。理屈っぽい左翼にしては、判り安いオルグ方針だ。

戦後政治の中で、日本の左翼・とりわけ新左翼と呼ばれる政治潮流の役割については、評価は全くまちまちで、定説はない。また、関わった個人も苦渋に満ちた過去を抱えて、そのことに触れられたくない人も多いに違いない。今にして思えば、私達は知識も経験もお話にならないくらい軽く、視野も狭く、何よりも無学であったと思う。

しかし、肝心なところで、大衆運動の火消しにばかりウツツをぬかす社会党・共産党の既成左翼を凌駕し、私達こそが本当の意味で国家権力を震撼させ得た数少ない戦後史の潮流の一つであったことは、確かであるとも思っている。ただ、このことを論ずるのは、本稿の目的ではないので、話を戻す。

同志社大学と云えば、結構マンモス大学の一つではあるが、その中では新聞学専攻と云う限られた枠の為、この私とも少なからず接点はあった。ところが、私が活動家であることを辞めたのと入れ替わるように、彼は熱心に政治闘争に取り組み出したので、実はその面での接点は余りない。

やがて彼は政治闘争の裁きを受けて、約三年間服役。この時、お登紀さんと衝撃の獄中結婚で、話題を振りまいた。ところで私達は激しい政治闘争の傍らで、まだ当時は市民権を得た言葉にはなっていない「ボランティア」活動のメンバーでもあった。ご存じFIWCと云う名の労働奉仕のキャンプをする団体で、彼もまた、その一員として、ここ大倭で活動をした一人なのである。そのキャンプの中で流行った歌の一つが、森繁久弥の「知床旅情の唄」で、誰がその歌を仕入れて来たのかは忘れてしまったが、お登紀さんがリメークするよりは、随分以前で、歌詞も少し違っていたように記憶している。彼女の声でこの歌を耳にした時、「さては、敏夫が教えたナ」と思ったものだ。

さて、獄中生活。彼が人生の中で一番よく勉強したのは、たぶんこの時期ではないかと云うのは、同じ同志社の先輩・木村聖哉さんの見方であるが、この私もそう思う。そこで、浄化に励んだ彼は下獄後、人間のあり様の原点は農業にあり……と感得し、農事組合法人「鴨川自然王国」を設立した。「人はどう云う社会に希望を持つのか」を

テーマに政党「希望」を旗揚げし、参院選に立候補した時には、この私めも、数十年ぶりに応援の戦列の末端に加わったが、あえなく落選。その選挙運動中のある時、「それにしても、大学に入學時（政治闘争への参加を）そのかすだけ、そのかしておいて、やつとその気になった時『俺は辞める』と高らかに宣言して、格好よく去って行った杉さん。私にとっては、インパクトの強い出来事やつたけど……」（実はこの時、私は当大倭への入植を考えていた時期であった）と穏やかに語ったのが、結果的に最後の接触になり、その後相まみえることは私はなかった。

人は分不相応な地位につかされたり、能力以上の社会的評価を得てしまったりした時、自分と云うものを見失う事例は枚挙に暇がないが、妻のお登紀さんは、ある雑誌のインタビューの中で「若くして有名になると、その後の人生は生きにくいものだけど、彼は『有名性』に惑わされず、常に未来を見つめ、課題に挑戦し続け、爽やかに五十八年の生涯を終えた」と語っている。

石川啄木も芥川龍之介も太宰治も早世の人生は美化されやすい傾向があるとは云え、彼の人生もやはり美しかった。いま一年余を過ぎて、つくづく思い入っているのだが、実は彼が他界した頃、この私は人生最大の修羅場の最中で、葬儀を含めて、彼を偲ぶどの催しにも参加出来なかった。したがって、些か間の抜けた追悼であるが、私の雑感をしたためたまでである。

この「おおよまと」紙の読者の中には、私よりもっともつとこの藤本に近かった方がたくさんおられる筈なので、私が寄稿するのは、僭越極まりないことですが、あくまでも私にとつての藤本敏夫ですので、どうかお許し下さい。

# あじけい日記

9月12〜18日 少し前のニュースですが、東京都八王子市の春日作太郎さんが邑に犬2匹と共に滞在、交流の家泊。

10月11日 馬場田で稲刈りが行われました。20人位の参加者で順調に片付き宴会を楽しみました。昇ちゃんが何故か珍しく長時間働いてましたね。今年から孫を連れて参加している反保良さん、「お米がどうやってできるか見せておかないか」と思っただからとのこと。

10月11〜13日 川越市の馬場美佐子さん、東京の石川千鶴子さん、群馬県安中市の桜井節子・誓子さん親子が来邑。  
10月12日 祝会。初参加者3人、久しぶりの人もいて参加者は多め。各人の今の思いを出し合っ

てテーマとしました。  
この日、大倭印刷(株)の中島武宣さんが小野マリ子さんと奈良ロイヤルホテルにて挙式。大勢の列席者の祝福を受け、新しい人生への第一歩を踏み出されました。奈良と埼玉の遠距離は二人の心は勿論のことですが新幹線や夜行バスが間をつないでいたとか。新居は学園前近郊だそうです。突然の訪問は避けてね。とは本人達が言っているかどうかは知りません。  
10月15日 大倭神宮月次祭。

10月16〜17・23〜24日 大倭病院職員秋の旅行は金沢川峡温泉泊で、兼六園や武生方面へ。  
10月18〜19日 紫陽花邑を舞台に「賑栄い塾」が行われました。

5人の話し手(真木悠介・出口三平・野本三吉・阿木幸男・岸田哲さん)のお話などは、いずれ本紙でも紹介する予定です。並行して交流の家ではFIWC定例委員会も行われ、中国キヤンプの報告会もありました。

10月20日 (有)倭商社長の中島康治さんが、午後7時頃、事故のため急逝。満60歳でした。拝殿に於いて21日午後7時より前夜祭、22日午後1時より帰幽祭が執り行われました。4〜5頁の追悼記事をお読み下さい。  
10月23日 大倭大本宮月次祭。  
10月24日 夜、大倭会館で故中島康治さんの五日祭が行われました。

10月25日 奈良パークホテルで邑交会が開かれました。  
10月26〜27日 大倭会館の一泊文化行事で下関の壇ノ浦を訪ねました。それぞれの事情で色々な参加パターンがありました。詳細は12月号で報告します。  
10月28日 夜、大倭会館にて故中島康治さんの十日祭。  
11月1〜7日 亀岡市の向井弓子さんは、交流の家泊で邑に滞在。法主様のテープ起こしも仕上げてくれました。

11月2日 田んぼで脱穀が行われました。稲刈りの時には、中島康治さんの働く姿があったのに……。順調に昼過ぎには片付き、大倭会館に戻って昼食。昨年は豊作でうるち米・もち米とも1年分の神饌に足りたそうです。心配された今年の収量も昨年に続く歴代2位の成績で「後半の暑さと、また6年間のEM農法で地味がついてきたんでしようか」と双葉館のお話です。  
11月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑俵の会。  
11月9日 第15回大倭会文化講演会。小雨降る日、拝殿にて石川利光さんに「一管懸命」と題して、お話と尺八の演奏を聴かせて頂きました。尺八によって生かされていると語るその姿勢と美しい尺八の音色に、すっかり魅了されました。また石川さん



んと特別ゲストの松本太郎さんの「鹿のおね」という曲のセッションもありました。懇親会では、石川さんの奥さん(バイオリニスト)と娘さんも参加され、集った方々で感想を語り合いました。法主様も杉本さんを通して「今日は楽しみやのう」「うつしみの時の心で聞くのもええものやな」と言われたとか。  
大倭安宿苑では  
10月14日 奈良県福祉大会での永年勤続表彰者を囲んで祝賀会をしました。  
(菅原園)  
11月4日 サンルームで、奈良県知事選挙・衆議院選挙の不在者投票を実施、17名が投票。  
(須加宮寮)  
10月30〜31日 17名が石切のホテルセイリユウに宿泊、翌日は梅田の空中庭園へ行きました。  
(長曾根寮)  
10月19日 4階フロアで秋の運動会。総勢80名が参加して一生懸命に競技しました。  
10月28日 4階フロアでイトーヨーカドーの協力により出張スーパー開店。大好評でした。  
(八重垣園)  
10月18日 皆で住本静子さんの百歳を祝いました。また24日には大川奈良市長が来園、記念品などを手ずから頂きました。  
10月29日 俳句の会。「秋冷えや足の老来ひしひしと」「布団干し程よき温み陽の匂い」

# あんない

\* 金鶏祭(大倭神宮)  
12月4日(木)午後2時より大倭神宮にて。

金鶏祭は、九州勢(神武側)が長曾根邑を攻めた際、天に示された金色の奇瑞によって両軍が戈を収めたことを記念する祭典。この金色の奇瑞を金鶏といひ、和の光の象徴となっている。『やわらぎの黙示』百二十三頁「日本精神の源流」―長曾根邑のすめらみこと―参照。  
\* 月次祭(大倭神宮)  
12月6日(土)午後2時より大倭神宮にて。

\* 大倭会主催第四二一回祝会  
12月14日(日)午前9時より恒例「掃除みそぎ」として、大倭紫陽花邑境内の大掃除です。これに先立ち8時より大倭墓地の大掃除が行われます。  
\* 月次祭(大倭神宮)  
12月15日(月)午後2時より大倭神宮にて。

\* 日聖祭(大本宮拝殿)及び直会演芸会  
12月23日(祝日)大倭元旦。午前10時30分より祭典、午後1時より直会演芸会。(6頁参照)  
\* 大倭神宮境内・周辺大掃除  
12月28日(日)午前10時より行います。有志の皆さんはご参加下さい。昼食はお弁当が用意されます。